

2012 年度夏期コース報告

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40 週間の年間コースとは独立して夏期コースが設置されている。本年度は 2012 年 6 月 21 日（木）より 8 月 8 日（水）まで実施した。

本年度はコースをさらに充実させるため期間を従来よりも 3 日間延長するとともに、カリキュラムに新たに「個人授業」と「会話テーブル」を組み込んだ。これらは、自分の専門分野に直結した日本語を学びたい、そして、自分と同世代の日本人学生と交流する機会を持ちたいという、最近高まっている学生からの要望にそれぞれ応じたものである。

2 夏期コースの目的と特徴

夏期コースも年間コースと同じく、研究者や法曹界、ビジネス界を目指す学生を対象として、日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育する、という目標を掲げている。学生は大学レベルの機関で既に 2 年から 3 年程度の学習を済ませていることが入学の条件であり、本コースが提供しているのはいわゆる中上級以上の日本語教育である。これも年間コースと同様である。

近年は、前途有望な学生でありながら、そして上級日本語の集中的教育を受けることを熱望していながら、様々な事情で年間コースへの入学が困難、あるいは入学を希望しているが決定には至らない、という学生が多い。そこで、そのような潜在的受講志願者に対して幅広く門戸を開き、日本研究センターの教育を経験できる機会を提供していきたいという観点から、夏期コースは年間コースの簡約版とも言うべき内容になっている¹⁾。

一方で、本コースを年間コースから大きく区別する特徴は、教員構成である。夏期コースでは、年間コースを担当する常勤・非常勤講師に加え、普段はアメリカやヨーロッパで教鞭をとる講師を広く招いている。本年度は、イェール大学、スワスモア大学、デューク大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ワルシャワ大学から教員の参加を得た。夏期コースは、多様な背景を持つ日本語教員の経験や意識、方法論を共有する場としても機能している。

3 学生の構成とクラス編成

今年度の受講者は40名であった。その内訳は、大学院生が36名、大学学部生が3名、大学卒業後就職活動中の学生が1名である。受講者はコース初日の試験で習熟度や得手不得手の傾向を判定され、これに応じて6つのクラスに分けられる。各クラスは1名の担任と、1~2名の授業担当講師が運営した。

夏期コースは年間コースと独立して学生を募集しているが、今年度参加者の大学院生36名のうち2名は「サマー・リクワイアド」、つまり年間コースへの参加準備のために夏期コース受講を義務付けられた学生であった。年によってはサマー・リクワイアドと「サマー・レコメンデッド」（年間コースへの参加準備として夏期コース受講を推奨された学生）が合わせて6~8名程度にのぼることがあり、そのグループのために1クラスを割り当てる場合もあるが、今年度は少人数であったため、他の通常受講者との区別なくクラス分けを行った。

4 教育活動の詳細

本章では、夏期コースの教育活動についてより詳しく述べる。

4-1 授業・校外学習

授業では、極力生教材を用いた読解ならびに聴解演習、文法、漢字・語彙、待遇表現の練習、そして作文、発表、議論といった運用練習を集中的に行った。また、日本文化と社会をクラスの外で体験できる校外学習の機会も5回設けた。コースの最後には、学生がコースで学んだ日本語を生かし、自分の専門分野等について発表と質疑応答を行う口頭発表会が開催された。本コースは成績を発行していないが、クラスごとに行う中間試験と最終試験によって学生の達成度を判定しており、この結果は学生自身の後学のために活用されている。

毎日の時間割は、50分授業が4コマという構成である。うち3コマを午前9時40分から午後0時30分までの間に行い、1時間の昼休みを挟んで午後1時30分から4コマ目を行なった。校外学習のある日は、午後の授業時間がこれに充てられる。高度に知的な内容を読み、書き、話しそして聞くことができるようにする、そして公の場で社会人として通用する言葉遣いを身につけるといふ大きな目標は全クラス共通であるが、4コマの授業時間（校外学習を除く）の中で何をどのような順番で行い、教材として何をを用いるかは、主任と協議の上で各クラス担任が主体的に決定している。教育内容はコース開始前に計画されるが、クラスに割り当てられた学生のレベルや学習ストラテジー、あるいは関心の対象が事前の想定と合わないことも多く、そうした場合には予定された読み物をコース期間中に変更するなどの調整が行われる。

校外学習の詳細等、通常授業以外の日程については、末尾の資料を参照されたい。

4-2 授業の実例

本コースでは 2~3 年以上の日本語学習経験を学生の応募条件としていると先に述べたが、実際に集まってくる学生の能力は多様である。今年の場合、最も下目のクラスには日常会話にさえ苦労し、一般雑誌の記事を 1 段落読み通すのに数時間を要するような学生が集まり、授業では初級文法の復習と短文レベルの発話練習が不可欠であった。一方、最上級のクラスには大衆文化や社会問題について自分で資料を調べ、インタビューを行い、原稿なしに流暢なスピーチが行えるレベルの学生が参加し、例えば 1 週間で近代史の専門書の 1 章を読みつつ議論を戦わせるといった内容の授業が行われた。

本節では、筆者が担任した「夏草」クラスの授業の実際を参考までに挙げる。このクラスは上から二番目のレベルである。アメリカの大学や大学院の授業で学んできた初級と中級の語彙・文型がきちんと定着しており、社会問題等に関してさほど苦労せずに意見を述べることができるが、高度に抽象的な内容の文章を読んだりそれについて議論したりするにはまだまだ語彙力も行間を読む力も足りない、という学生が集まった。

1 時間目 (9:40~10:30)

- ・ ミニ発表+討論：1 日 1 人の学生が 3 分程度のスピーチを準備し、発表後、質疑応答。
- ・ ニュース報告：前日に各自で視聴してきた NHK ニュース 7 から、興味を持ったニュースを報告する。
- ・ 言葉の使い方テスト：前日の読解授業（2 時間目参照）で扱った単語や表現、文型の読み方、意味、使い方を、例文の作成を通して確認する。

2 時間目 (10:40~11:50) 2

- ・ 読解演習：課題の読み物の意味を確認しつつ、そこに含まれている重要表現・文型を使って例文を作る練習をする。また、読み物の内容についての意見交換も時間の限り行う。読解練習で扱った記事は以下の通りである。
- ・ 東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌『上級日本語教科書 文化へのまなざし』（東京大学出版会）から一部
- ・ 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会『報告書ダイジェスト』から一部
- ・ 宮台真司「『どう生きるのか』という本当の問いに向き合うとき」（神保哲生、宮台真司、小出裕章、河野太郎、飯田哲也、片田敏孝、立石雅昭『地震と原発 今からの危機』（扶桑社）所収）から一部
- ・ 東浩紀「人文系が語るネット」（it.nikkei.co.jp）

- ・ 川上弘美『神様 2011』（講談社）
- ・ 高橋源一郎『恋する原発』（講談社）から一部

3 時間目（12:00～12:30）

- ・ 待遇表現：[『待遇表現（FORMAL EXPRESSIONS FOR JAPANESE INTERACTION）』](#)を用いた待遇表現の練習と、梁晶子・大木理恵・小松由佳『日本語 E メールの書き方 Writing E-mails in Japanese』（The Japan Times）を用いた電子メールの書き方の練習。

4 時間目（13:30～14:20）

月曜～水曜：1日1人が順番に担当する討議責任者の決めた話題について、クラスで討論を行う。責任者は討論を主導し、述べられた意見を最後にまとめる。

木曜：その週の1時間目に「言葉の使い方テスト」で取り上げた単語や表現、文型の復習。

金曜：校外学習。ただし、最後の金曜日は通常授業（試験および口頭発表会のための準備）。

4-3 個人授業

個人授業は、クラス担当の教員が学生と1対1で接し、学生の個別のニーズに合わせた活動を行う目的で設置したものである。時間はコース全体で学生1人あたり1時間を確保した。クラスの日々の時間割の中にどのようにこの時間を組み込むかは担任に一任したが、1時間を数回、つまり30分あるいは20分という単位に分け、2~3週間に一回程度の頻度で個人面談スケジュールを組むクラスが多かった。

この時間を何の目的に使うかはクラスによって異なるが、例えば期末発表会の原稿チェックならびに発表リハーサルや、クラス授業とは別の読み物を学生自身が探して読む「ミニ・プロジェクトワーク」等の活動が行われた。

4-4 会話テーブル

会話テーブルは、学生が教員以外の日本人、特に彼らと世代の近い若者と自由な雰囲気ですべて日本語会話を練習し、かつ交流を深める場を確保する目的で設置したものである。学生は上述の通常授業が終わった後、週に計1コマ分程度の時間が与えられ、日本研究センターに勤める教材助手や、青山学院大学、神奈川大学、慶應義塾大学から招いた大学生インターンとともに、伸び伸びと楽しみながら会話の練習をすることができた。

1クラスは6人あるいは7人の学生からなっているが、会話テーブルでは、学生に可能な限り発話の機会を与えるためクラスをさらに分割し、2~4人を1グループとした。助手・インターンは、それぞれ1日に2~3グループの学生の相手をする事となった。

5 おわりに

学生の構成を見ても容易に理解されるように、夏期コースは大学院生の受講希望が多い。また、日々の授業や自宅学習課題の負担が非常に重いカリキュラムであるにも関わらず、これまでに集まっている今年度受講者のアンケートからは、彼らの高い満足度が伺える(27の回答のうち、コースの4段階評価を Excellent とした者 18 名、Good とした者 9 名、Fair ならびに Poor とした者ゼロ。また、全回答者が本コースを他の学生に推薦する意志を表明している)。そして、このような高評価はここ数年一貫している。

年間コースの長年培ってきた評判が夏期コースへの強い期待につながっていることは言うまでもないが、実際に受講した学生が自分の所属機関に戻り、同級生や後輩に本コースを推薦してくれることで、志の高い学生がさらに多く集まってくるという循環が生まれているのは好ましい傾向である。また、夏期コースを経験することによって日本研究センターの教育に魅力を感じ、年間コースへの志願そして入学に至ったという学生も増えつつある。これも本センターにとって嬉しい成果である。

学生の高い挑戦意欲に応える密度の濃い教育と、それを支援する校外学習等の諸活動の充実を今後もさらに追求していくことが求められている。

(あきざわ ともたろう / 2010～2012 年度夏期コース主任)

注

- 1 ただし、年間コースで必須科目である S K I P (Special Kanji Intensive Program) は、夏期コースでは学生の自由選択制としている。
- 2 「夏草」クラスでは、読解演習により多くの時間を割くため、2 時間目の授業時間を延長し、逆に 3 時間目 (待遇表現) を短縮した。

資料：2012年度夏期コース 校外学習等

6月

- 21 (木) 所長より挨拶、クラス分け試験(筆記、聴解、発話) (9:40~12:00)
- 22 (金) オリエンテーションと緊急時避難訓練(9:40~12:30)、歓迎会(12:30~14:00)
- 29 (金) 校外学習①「横浜の日」 4班に分かれ市内見学
A. 海外移住資料館と海上保安資料館、B. 開港資料館と氷川丸、C. 横浜地方裁判所、D. 生麦事件碑と麒麟横浜ビアビレッジ
「かながわ国際ファンクラブ」による交流会(18:00~20:00、希望者)
- 30 (土) 鎌倉スタディーツアー
(文教大学野呂田純一先生「文化交流演習」との合同授業、希望者)

7月

- 4 (水) 横浜市立図書館ツアー(希望者)
- 6 (金) 校外学習② 臨濟宗・圓覚寺派総本山 圓覚寺 座禅研修
- 13 (金) 中間試験(9:40~12:30)、校外学習③ 歌舞伎鑑賞教室「毛拔」
- 20 (金) 校外学習④ 日本人学生との交流会、夕涼みの会(16:30~18:30、希望者)
青山学院大学、学習院大学、神奈川大学、慶應義塾大学、東京大学、早稲田大学より多数の大学生、大学院生の参加を得た。
- 27 (金) 校外学習⑤ 「東京の日」 4班に分かれ東京を見学
A. 国会議事堂(参議院)と憲政記念館、または国立国会図書館、B. 東京国立博物館、C. 靖国神社・遊就館

8月

- 6 (月) 最終試験(9:40~12:30) 午後は発表会準備
- 7 (火) 口頭発表会(9:40~14:20)
1人あたり質疑応答を含め15分、関心・専門別に3箇所に分かれ同時開催
- 8 (水) クラス担任との個人面談(9:40~12:30)、修了式と祝賀会(12:40~14:00)